

事例

生徒の手によるブランド米「幻の天日干しコシヒカリ」がつなぐ持続可能な農業への架け橋

学校法人^{ぶつきょう}佛教教育学園 ^{ひがしやま}東山中学・高等学校（京都府）

きょうと さきょう 京都市左京区にある東山中学・高等学校では、令和5（2023）年3月から「東山中高ブランド米プロジェクト」と題して、田植えから、稲刈り、脱穀、販売までのサプライチェーンの一連の流れを生徒が主体的に取り組むプロジェクトを行っています。本プロジェクトは、学校長が、国際情勢による食料価格の高騰をはじめ、日本の食料自給率の低さに危機感を抱いたことをきっかけに、国内において自給率100%に近いお米に着目し、生徒たちに米作りを通じて社会課題について考えてほしいというところからスタートしました。取組の中では、関係者が相互に連携し、農家や企業だけではなく、生徒や学校といった関係者全てが笑顔になれることを一つの大きな狙いとしています。

生産に当たっては、機械化が進み、伝承する担い手が減って継続が困難になりつつある「天日干し」の製法を取り入れ、「幻の天日干しコシヒカリ」と命名し、生徒が自ら生産

したということも付加価値としてブランド化し販売することを目指しています。生産方法の指導や日常的な水田の管理は生産者に協力を得ているほか、販売に当たっては、価格設定や宣伝方法等、地元企業の方から御指導いただきつつ企画しています。天日干しの作業は、伐採した竹を梯子状に組み、一定の間隔で稲をかけて乾燥させるため、機械では代替できず、時間も労力もかかります。これを生徒が行うことで、高齢化等により人手不足な生産者にとっても大幅な作業効率の向上につながることや、学校のプロジェクトとして実施するため、取組に係る分の米はまとめて学校が買い上げることで、学校側だけではなく生産者側にとっても安定した収益になるなどのメリットがある形となっています。なお、収穫した米はオンラインでの予約販売に加えマルシェにて販売し、令和6（2024）年度は前年よりも作付面積を増やしたことも相まって、800キログラムの予定販売数を完売し30万円を超える利益を上げるまでに至りました。

唯一無二のおいしさがあるものの、生産には手間とコストがかかるという天日干し米の栽培から販売までを実際に体験することで、付加価値を付けて販売していくことの難しさや、農業そのものの大変さや有している課題、また経済の流れを学ぶ貴重な機会となっています。活動を通して、農業が直面している技術的・環境的な課題の現状が明確になり、生徒たちの中に、これらを将来的に解決していかなければならないという気持ちも芽生えました。

今後は生徒が実際に携わる日々の農作業についても積極的に増やしていくほか、今回出た利益により脱穀機を購入して天日干しできる稲の量を増やしていく予定です。持続可能な農業の未来を構築するため、様々な課題と向き合いながら、生徒と農家、地域社会をつなぐ架け橋としての役割を果たせるよう、引き続き取り組んでいきます。



天日干しした稲の様子



収穫した天日干し米